

# 佐藤仁重

写真家として活躍するかたわら  
関東本部委員として多くの会員を指導  
女性写真愛好者の頼もしいリーダー



——「紐育(ニューヨーク)の休日」(朝日新聞社2004年)という写真集があります。おしゃれで洗練されたイメージの作品です。ニューヨークという危険、汚いという印象がありますが。  
「1978年に初めて訪れてからこれまで30数回通っています。自然や風景の写真を撮るのも好きですが、都会育ちのせいかニューヨークのような大都会の喧噪や躍動感に引きつけられません。行き始めた頃は治安も悪く、地下鉄に乗ると人びとの鋭い視線に圧倒され、街を歩くのは緊張の連続でした。でも、9・11のテロ事件以降は安全に力を入れ、女性のひとり旅もしやすくなりました」  
「写真は瞬間をおしゃれに素敵に切り取りたい。光が織りなす光景をま

めたい。朝、夕の時間、特に朝の光が好きなのでニューヨークでは夜明け前に出かけます」

——最近では京都府の木津川市を撮った写真展もありましたね。自然の風景、お寺や仏像の写真、日本独特の湿潤な風土や静寂感が伝わってきました。

「木津川市の魅力を伝えるためのプロジェクトに参加しました。観光協会の協力もあり、撮影不可の国宝や重要文化財、風景やお寺などを撮影することができました」

「栃木県日光市の依頼で、2011、3年の日光フォトコンテストの審査員をしました。日光をテーマにした写真展があったので、日光の自然もずいぶん撮りました」

——東京・六本木に生まれ、ご両親は写真店を営んでいました。

「お店は今の六本木交差点から100メートルくらいのところにありました。カメラ販売やフィルムの現像・プリント、スタジオもありました。物心ついた時にはカメラを持たされていました。ベビーコンタ、ベビーパール。ベスト判のフィルム



お父さんとお兄さんを撮影する8歳の仁重さん(左)



父・岡島慶松さんと母・数枝さん

でした。小学校に上がるとオリンパスペンやローライフレックス、マキナを使っていました。小さい頃は親と離れるのがいやで、一緒に暗室に入っていました。深タンクの現像液に落ちたこともあります(笑)。そのうち、お客さんのカメラにフィルムを入れるくらいならお店の手伝いもできるようになりました」

「高校・大学は写真部に入っていました。高校ではライカを使っていました。大学では顧問の先生より立派なカメラはまずいなど一眼レフカメラのペンタタックASPを買ってもらいました」

——ずいぶん、恵まれた写真環境にありましたね。

「実は両親はそれぞれ写真クラブを主宰していました。父(岡島慶松)が『東京写真倶楽部』を1950年に立ち上げ、母(岡島数枝)は1960年に『女性支



部(現、東京女性支部)』を作りました。家族旅行は会員さんと行く撮影会、家族写真はみんなで撮った集合写真でした(笑い)。自宅が店舗を兼ねていたこともあり、家で例会を開いていたので、渡辺義雄先生や英伸三先生など有名な写真家が出入りしていました」

——大学は女子美術短期大学に進みました。学生結婚も。

「兄がいますが、当時は写真には興味がありませんでした。私が高校を卒業する時、両親に家(の仕事)を手伝えと言われましたが、母の苦勞を知っていたので大学へ進みました。もともと油絵の画家になりましたかというのもありました。大学を卒業したらまた家を継げと言われるのがわかっていたので、早々と結

婚してしまいました(笑い)」

「東京・日本橋人形町で大正8年から続く老舗の『喫茶去(きつさこ)』快生軒(かいせいけん)の3代目が主人でした。今は息子が4代目です。主人も写真が好きで、結婚指輪の代わりがライカM4でした。喫茶店のお運びもお客様のご案内も得意でしたが、結局10年と少ししか働けませんでした」

——「喫茶店」から写真業に移ったのはなぜですか。

「1984年に母の女性支部発足25周年を記念して朝日新聞の読者ホールで祝賀会がありました。前田真三先生をお呼びして、講演会を開きました。この時は母がやっていた六本木写真教室の仲間で作った支部が6支部になっていました。

同じ年に母が末期ガンとわかります。義理の父から実家へ手伝いに行くように

言われて、初めは手伝いでしたが、母が亡くなった後、本格的に母がやって来たことを引き継ぐことになりました」

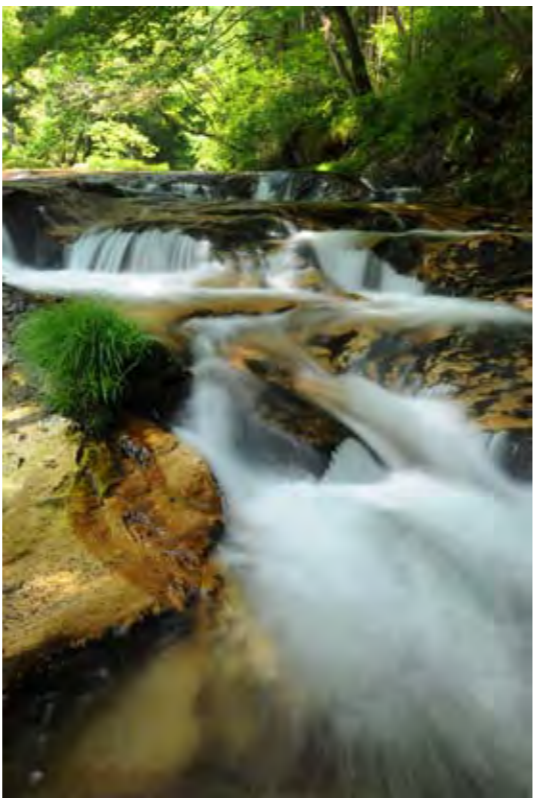
「義理の父から学んだのは『継続』することの大切さです。快生軒は老舗の喫茶店ですが、その長い歴史には厳しい時代があり、特に戦中・戦後は売れなかつた。なんとかしのいで今に至った。そんな話をしてくれました」

「渡辺義雄先生ともご縁があつて親しくさせていただきました。母が亡くなり女性支部を自分が引き継ぎましたが、渡辺先生は『あなたのお母さんは偉かつたですよ。何があつても続けなくてはいいません』と言ってくれました。『継続』

へのこだわりを大切にしたいと思っています」

——プロを意識し始めたのはいつの頃からですか。

「喫茶店をしながら4人の子育てをしました。26歳の時、義理の母に後押しされ、気分転換にと友人とアメリカ縦断旅行に出かけました。いろいろ歩きました。特にニューヨークの印象が強かつた。その後、自分の写真を見つめ直したいと、知人でニューヨーク在住の写真家・栗田紘一郎先生を訪ねて初めてのひとり旅を。以来、撮り貯めた写真で1997年に初めて個展を開催しました。何度か個展をするうちにお仕事を依頼されるようになり、プロ意識が芽生えてきました。それまでは写真は趣味でした(笑い)。



いずれも日光



いずれもニューヨーク

雑誌の仕事やコンテンツの審査、イベント講師のお話をいただくようになりました」

——全日本写真連盟東京・女性支部代表として、「女性だけの写真教室」をはじめ女性が中心の数多くの支部の指導を行っています。昨年の12月には朝日新聞の浜離宮小ホールで恒例の「クリスマス合同例会」がありました。

「今では13支部まで増えて、その中から150人が参加しました。会場入り口に日頃、お世話になっている写真関連のメーカーさんにブースを設けていただき、会員さんに最新の商品や情報に触れてもらいます。ひとり1点のプリント作品を並べ、互選投票や有名写真家の先生に審査や講評もしていただきます。合同で行う狙いは会員さん同士の出会いの場

を作ること。会員さんの写真生活がさらに豊かになってもらいたいからです」

——会員さんへの指導で気をつけていることは。また、どのようなお付き合いを心がけていますか。

「人生は楽しむことがまず一番。写真はその次でいいと思っています。スポーツでも登山でも、目的(実際に行う)の先に写真がある人もいます。厳しさより楽しさ。だから、うちの会員さんはみんなのんびり(笑い)。どんな人にも楽しく写真を撮ってもらいたいです」

「いつもたくさんの生徒さんに囲まれていた母のことをよく思い出します。どの人とも公平・平等に接する。特定の人を囲い込むようなことをしたら、逆に人は離れていきます。母の後ろ姿から学ん

だことです」

——写真家になるべくしてなったというより、「出会い」が大きかったのでは。

「色々な人に助けられてプロになれました。お金ではない人の財産をつくづく思います。たくさんの人に支えられ、教えられて今があります」

——好きな写真家は。これからもニューヨークですか。

「アンリ・カルティエ・ブレッソン。さりげなく作っている世界に引かれま

す。木村伊兵衛さんや植田正治さんも好きです」

「ニューヨークはずっと撮り続けま

す。でも、色んなジャンルにも挑戦したい。木津川市の浄瑠璃寺で撮影しているとき、土門拳先生を思い出しました。土

門先生もきつとこのような厳かな気持ちで撮影されていたのだろうと想像しました。撮っていてすごくいい気持ちになりました。日本の歴史に出会えて光栄でした」

「何げない木立、地元の人たちにとって通り過ぎてしまうようなものでも作品になる。写真が介添えることによって新たな世界が広がる。そして、写真は出会いだと思えます」

(聞き手 鈴木好之)

佐藤仁重(さとう・よしえ)  
東京・六本木生まれ。  
女子美術短期大学造形科卒。日本写真家協会会員。全日本写真連盟関東本部委員。国内・NYで個展多数開催。全国各地で写真教室や審査員をつとめる。写真集「紐育(ニューヨーク)の休日」(朝日新聞社)。